

第2章

17世紀のカンボジアにおける交易勢力と交易品

遠藤正之

立教大学

1. はじめに

17世紀のカンボジアについては、繁栄と栄光の時代とされるアンコール時代(802～1431)に対し、長期間にわたる衰退期(ポスト・アンコール時代:1431～1863)の一部という見方が支配的だった。しかしながら、このような見方は1990年代以降次第に見直しが進み、当時のカンボジアは「交易の時代」の東南アジアにおける主な勢力の一つであったことが指摘されるようになりつつある¹⁾。

本稿では、17世紀のカンボジアにおいて交易勢力=交易活動に携わった人々と、彼らが扱った産品を取り上げ、当時のカンボジアを取り巻く交易状況について概観する。当時カンボジアで活動していたオランダ人の記録²⁾を主に利用しつつ、王権を取り巻く各交易勢力の相互関係と交易産品の流れに彼らがどのようにかかわっていたかを明らかにし、当時のカンボジアが「交易の時代」の東南アジア世界において十二分に存在感を示していたことを改めて明確にした

い。

2. 17世紀カンボジアの主要な交易勢力

本節では、当時のカンボジアにおける交易勢力について概観しつつ、各勢力の相互関係についても論じる。

オランダ人が商館を開設した時期(1636～67)³⁾までには、カンボジアにはすでに様々な人々が来航し、交易活動に携わっていた。そのうち、華人に2名、

1) [Mak Phœun 1995] [北川 2006: 102-154] [遠藤 2017] など。

2) 史料として、ミュラーが編纂したカンボジア・ラオス関連史料集 [Muller 1917]、バタヴィア城日誌(以下DRBと略)などを利用する。

3) これ以前、1622年にもオランダは商館を開設したが、この時はアユタヤからの抗議によって、すぐに閉鎖している。

マレー人、日本人、ポルトガル人に各1名のシャーバンドル⁴⁾がいたという。このことは、この4つの勢力が居住人口も多く⁵⁾、当時のカンボジアで特に重要な地位を占めていたことを示したものと考えられる。ここではこの4勢力を中心に据えつつ、彼ら以外の諸勢力の活動についても言及する。

1) 華人

オランダ人の記録によると、彼らがカンボジアに初めて来航した時、すでに華人は活発に活動していたが、いわゆる「(普通の)華人」と「イスラーム化した華人」の二種類がいたという。当時カンボジアは、1567年の明朝による海禁政策の緩和以降、華人の重要な活動拠点となったマレー半島東岸の港市国家パタニと盛んに交易を行っており、同地でイスラーム化した華人が相当数来航・活動していたものと考えられる。さらに、中国本土から来航する華人も加わり、16世紀末から17世紀初めにかけて、その数は増加の一途をたどった。

イスラーム化した華人の代表者、プレスコルニョクは、当時カンボジアにおいて有力商人の一人として活動しつつ⁶⁾、華人シャーバンドルの一人でもあった⁷⁾。彼には、もう一方の華人の代表者グワンピックや日本人商人らとともにラオスに買い付けに向かった記録があり⁸⁾、「普通の」華人や日本人と円滑な関係を保っていた。また、イスラームを通じてマレー人とも良好な関係にあった。

しかし、1650年代に入ると、海域世界におけるパタニの重要性が低下したことにより、カンボジアとの交流が次第に衰退するのに伴って、パタニから来航する華人の活動も減退した。その一方で、福建・台湾に拠点を置く台湾鄭氏船(国姓爺船)の来航が増加するのに伴って、鄭氏の影響下にある華人の活動が高まった。世代交代も進み、イスラーム化した華人は華人人口の中で次第に比率を減らし、活動も次第に衰えていった。さらに、当時シナ海域で活発に活動していた鄭氏政権を抑える目的で、清朝が遷界令を発したことで、本土から来航する華人の数も減り、カンボジアで活動する華人の多数を、鄭氏系の華人が占めるようになった⁹⁾。

影響力を強めた鄭氏系華人は、王権と結びつき対日本交易を担当する主要な

4) ペルシア語で港の王の意。中世以降のインド洋一帯で広く見られ、港市での来航外国人にかんする領事業務・貿易管理を担当した [桃木 1996: 43]。

5) 推定ではあるが、当時の華人人口は約3000人、日本人は約350人、ポルトガル人はおよそ1000～1200人がいたとされる [岩生 1966: 331] [Kraan 2009: 13]。これに対し、例えばオランダ人は商館員全員を合わせても、十数名に過ぎない [山脇 1980: 141-143]。

6) [Muller 1917: 138]。

7) [DRB 1641: 90]。

8) [岩生 1966: 362]。

9) 1665年のオランダ商館長日記には「タタール人のように頭を剃った華人」、すなわち辮髪にした華人の記録もあり [Muller 1917: 424]、少数ながら鄭氏の影響下

勢力として活発に活動した。それは、対日交易独占を目論むオランダ人との対立激化につながった。彼らは、1667年にオランダ商館を焼き討ちし、VOCを最終的にカンボジアから撤退に追い込んだ。しかし彼らは、横暴な行為も多く、1670年までにカンボジアから追放された。

1683年に台湾鄭氏が降伏し、清朝が展海令を發布すると、中国本土から来航する華人の数は増加に転じた。しかし、この時期にはカンボジアが内乱状態に陥り、王都近辺の治安が悪化したため、従来の活動域であったメコン、トンレサープ流域からシャム湾沿岸へと活動の重心を移していった。

2) マレー人

華人と並んで重要な存在だったのがマレー人である。1567年の明の海禁政策解除後、華人商人が東南アジア海域に大規模に進出するようになるとシャム湾に面した港市パタニが重要な中継港となり、シャム湾においてマレー人商人の活動が活性化し、カンボジアとパタニの関係も親密になった¹⁰⁾。それに伴って、カンボジアに来航して活動するマレー人の数も増加した。彼らは軍事力として宮廷で重きをなす一方、海域世界とカンボジアの関係を取り持つ役割をも果たした。

オランダ人が来航する頃には、彼らの活動はさらに拡大した。まず彼らは、ラオスとの交易で重要な役割を果たした。オランダ人の記録によると、1641年のラオス探検の際、通訳を務めたのはマレー人であった。ラオスの王都ヴィエンチャンではマレー語が通用し、ラオス側も交渉役としてマレー人を派遣してオランダ側と交渉した。また、カンボジア王都でもラオス商人がマレー人町に在住しており、両者は密接な関係にあった。

一方、マレー人はカンボジアがVOCとの交渉を行う際にも重要な役割を果たした。1643年のオランダ商館長殺害事件とそれに伴う1644年の戦争によって、カンボジアとVOCの関係は一時的に断絶するが、その後の両者の関係再構築の際、交渉役を担ったのもマレー人だった。このような関係は、オランダ商館が閉鎖された後の1670年代まで続いた¹¹⁾。

さらに彼らはカンボジア王権とも密接な関係を保った。1642年に王位についたナック・チャンは、内陸部と海域世界を結びつける彼らの役割を重要視し、関係強化を図ってイスラームに改宗した。マレー人の代表者であるインチェ・アッサムは高官に取り立てられ、交易でも重要な役割を果たすなど、同王のもとで彼らは重用された。1658年にナック・チャンが廃位されると、彼らの

にない華人も存在していた。当時の状況から、彼らは広州、あるいはマカオからの来航者であった可能性が高く、後者である場合はその船はポルトガル人の委託を受けた華人船であったと考えられる。

10) マレー人有力者であるインチェ・アッサムがパタニ出身者であることから、パタニとカンボジアの密接な関係が伺える [Muller 1917: 132]。

11) 1670年代にカンボジア国王からバタヴィア総督に贈られた書簡の大半がマレー語で記されていることも、それを裏付けている [遠藤 2017: 79]。

活動に反感を持った新国王によって一時活動を抑制されたが、1670年頃には、その国王がVOCとの関係再構築を望んで方針を転換したことにより、復権を果たした。

その後もカンボジア王権と一定の関係を保ち、王宮で影響力を発揮する一方、17世紀末以降は華人と並んでシャム湾沿岸地域でも活動するようになっていった。

3) 日本人

カンボジアにおいて、日本人の活動は16世紀末のスペイン人の記録から確認できる。17世紀に入ると、東南アジア各地に朱印船が派遣されたが、カンボジアも主要な渡航先の一つとなり、王都には日本町が形成された。彼らは鹿皮など日本向け商品の交易に携わり、国王に仕えて活躍した者もいた¹²⁾。また、オランダ人と密接な関係にあり、彼らを管轄するとともに、通訳として彼らとカンボジア宮廷の間を取り持つ役割も果たした。彼らの活動は、1630年代の江戸幕府の一連の海禁政策（いわゆる「鎖国令」）の完成により日本からの渡航者が途絶したことで衰退したが、1660年代まで確認できる。

4) ポルトガル人

ポルトガル人も、16世紀末にはすでにカンボジアで活動していたが、1641年にオランダがマラッカを獲得すると、ポルトガル人コミュニティは急激に人口を増やした。当時、少なくとも200人の「白い」ポルトガル人と800～1000人の「黒い」ポルトガル人がいた¹³⁾。彼らは、日本、マカオとの交易に携わったが、交易独占を目論むオランダ人とは激しく対立した。特に、1642年、彼らがオランダ人を殺害した事件は王権を巻き込む訴訟事件へと発展し、最終的に1643年の国王によるオランダ人商館長殺害事件の遠因ともなった。また、彼らは王権とも密接なかかわりを持ち、高官として国王に仕えた者もいた¹⁴⁾。その一方で、他の東南アジア大陸部諸国とは異なり、彼らが傭兵として活動していた¹⁵⁾ことを示す記述はカンボジアについては見られず、実態がどのよう

12) その中でも森嘉兵衛という人物は1630年代からカンボジア宮廷に仕え、1642年に国王から日本人シャーバンドルに任命されるなど、王権と結びついて活躍した。彼の出身及び経歴は不明であるが、岩生成一は鎖国以前にカンボジア貿易に携わった長崎の町人森助次郎の一族ではないかと推測している [岩生 1966: 109-112]。

13) 前者はヨーロッパ血統、後者はキリスト教徒でポルトガル語を話すアフリカ、南インド、あるいはシンハラ系の人々だった。ただし、当時のオランダ商館長の報告によれば、ポルトガル人を管轄していたのは華人シャーバンドルだったという [Kraan 2009: 13]。当時ポルトガル人シャーバンドルの地位が何らかの理由で空席になっていたか、ポルトガル人の人口が急速に増加したことに対し、臨時にそのような処置が取られたのかもしれない。

14) [北川 2009: 90-92]。

なものであったかについての解明は今後の課題である。

5) その他、当時カンボジアで活動していた人々

以上述べた4勢力以外に、カンボジアで活動していた人々として、ラオス人、コーチシナ人、オランダ人をはじめとする、ポルトガル人以外のヨーロッパ人が挙げられる。彼らも、数は少ないものの活発に活動し、カンボジアで一定の存在感を示した。

①ラオス人

現在のラオスと東北帯を勢力圏としていたラーンサーン王国に居住する人々を指す。ラオスを中心とするメコン川上流域は、鹿皮、漆、安息香など、東西交易の重要な商品となる森林生産物の産地であり、彼らはそれらの産品をメコン川を介してカンボジアへ運搬した。当時、ラーンサーン王国は安定期にあり、メコンルートの治安も保たれ、彼らの活動は活性化した。加えて、アユタヤがラオス商人の待遇を悪化させたため、彼らはアユタヤを避けてカンボジアに來航するようになった¹⁵⁾。こうして、カンボジアにおけるラオス商人の活動が盛んになった。彼らはマレー人と親密な関係にあったため、王都ではマレー人シャーバンダルの管轄下に置かれ、マレー人や華人商人にラオス産の森林生産物をもたらした。

②コーチシナ人

コーチシナ（広南国¹⁷⁾）の住人を意味し、同地に住むベトナム人・華人をまとめてそのように称したものと考えられる。交易面では、広南に米を輸出するなど、カンボジア・広南間の交易に携わると同時に、広南を中継地とした対中・対日交易にも携わった。また、兵士として国王に仕えた者もいた。彼らと関係の深かった勢力は、広南との関係の深さからポルトガル人か華人の可能性が高く、どちらかのシャーバンダルの管轄下にあったと考えられる。

③ポルトガル人以外のヨーロッパ人：

オランダ人、イギリス人、デンマーク人、スペイン人

当時、東南アジアにはヨーロッパ人も多数來航していた。先述したポルトガル人以外にも、オランダ人、イギリス人、デンマーク人などが拠点を築き、交易活動に携わっており、カンボジアも例外ではなかった。彼らの人数は商館長を中心にせいぜい十数名に留まり、数的には大きなものではなかった。しかし、

15) ペゲーヤアユタヤでは、彼らが火器の使用に長けた傭兵として王権に重用されたことが知られる。

16) [ファン・フリート 1988: 123]。

17) 現在のフエ、ホイアンを拠点とし、紅河デルタを拠点としたトンキン（後期黎朝）と抗争した。

交易活動において、彼らはカンボジアでかなりの活躍を見せた。

オランダ人は、1636年カンボジアに来航し、翌年商館を開設した。彼らはすぐに積極的に活動を開始し、先行していたポルトガル人と対立しつつも、日本人、華人、マレー人らとの関係を深め、交易活動の拡大を図った。しかし、対日本交易の独占を志向する彼らの姿勢は、王権強化のために交易独占を目論むカンボジア王権と衝突し、ポルトガル人との対立問題も絡んで、1643年に商館長殺害事件が起これ、そのことが翌44年に軍事衝突へと発展し、結果として両者の関係は一時断絶した。しかし、その後すぐに関係修復のための交渉が開始され、1656～57年に両者間に和平が結ばれた。オランダ人はこれを梃子に対日本交易の独占を図ったが、カンボジア王の巧みな対応により、はかばかしい成果を挙げられなかった。1658年にカンボジアに反乱が起これ、隣国広南の軍が反乱側の援軍としてカンボジアに来襲すると、商館も焼き打ちされ、館員はアユタヤに避難した。1665年には再度条約が結ばれて、商館は再開されるが、対日本交易の独占を図るオランダ人の活動は、当時対日本交易を重視し、その活動を活発化させていた華人が台湾鄭氏系であった¹⁸⁾こともあり、彼らとの対立激化に直結した。その結果、1667年に商館は彼らに焼き討ちされ、商館長らは殺害され、これを機にカンボジアのオランダ商館は閉鎖されることになった。その後もカンボジア国王とバタヴィアの総督府の間で交流は続いたが、カンボジアに拠点を築いてオランダ人が活動することは、これ以降なくなっていった。彼らは、はじめ華人シャーバンドルに管轄されたが、国王に要請して、1640年代以降は日本人シャーバンドルの管轄下に入った。このことから対日本交易を重要視するオランダ人の意志は明らかといえる¹⁹⁾。

イギリス人とデンマーク人は、ジャワ西部に存在した港市国家バンテンに拠点を置き、カンボジアを含む東南アジア各地で活動した。前者は、1651年にカンボジアに商館を開き、交易活動を行ったが、十分な成果を上げるには至らず、1656年に商館を閉鎖した。しかし、その後も彼らは、1658年までは定期的にカンボジアに来航した。彼らが重要視した商品は、安息香と蠟で、これらをバンテン経由でインド方面へ運んでいた。後者の活動については、不明な点が多いが、1658年に起きた反乱の際、国王が支援を求めたヨーロッパ人勢力の中にデンマーク人の名前があることから、彼らもカンボジアに来航して活動していたことが確認できる。彼らを管轄したのが誰であるかは不明であるが、彼らがバンテンを拠点に活動し、またバンテンにカンボジアからマレー人がしばしば訪れていたことを考慮すると、マレー人の可能性が高いと思われる²⁰⁾。

このほか、スペイン人も来航した記録が見られる。彼らも安息香など、ラオ

18) 1662年の鄭成功による台湾占領によって、VOCは台湾鄭氏を敵対勢力とみなしていた。

19) 1657年に国王が彼らをマレー人シャーバンドルの管轄下に移そうとした際にも、彼らはこれを拒否し、日本人シャーバンドルの管轄下に留まった [Muller 1917: 364]。

20) 1658年の反乱の際、「イギリスのシャーバンドル」が殺害されたという記事があ

スからもたらされる森林生産物を求めて来航した。ただし、彼らがカンボジアに拠点を築いて活動していた形跡は見られず、マニラから派遣された船が単発で来航する程度であったと考えられる。

3. カンボジアの主要な交易産品とその流れ

カンボジアには、広大な平原地帯があり、そこでは伝統的に稲作が盛んであった。また、現在のベトナム・タイの国境地帯とシャム湾沿岸から少し内陸に入った地域は山岳地帯であり、豊かな森林が広がっている。加えて、豊富な水量をたたえ、内陸とカンボジアを結びつけると同時に、豊かな漁場でもあるメコン、トンレサープ両水系とトンレサープ湖がある。このような環境はカンボジアに様々な交易産品をもたらした。

本節では、カンボジアの主要な交易産品とそれがどのような人々の手で、どのような地域に運ばれたか、またその代価としてどのような品物が用いられたかについて述べる。

1) 森林生産物①：黒漆、鹿皮、蘇木

これらは、主にカンボジアからラオスにかけての森林地帯で生産され、現地の人々が採集したものを、ラオス商人やカンボジアからラオスに赴いた華人、日本人、マレー人が集荷してカンボジア王都に運び、そこから主に華人船やオランダ船によって（朱印船時代には朱印船も）日本や中国に向けて運ばれた。特に日本は最大の需要者であった。

中でも黒漆は、当時カンボジアが東南アジア最大の輸出地であった。それは日本に運ばれたのち、漆器として加工され、完成品が再度海外へ輸出された。鹿皮と蘇木は、シャムのものが有名であるが、カンボジアにとっても重要な輸出品であり、前者は袴、羽織、足袋などの原料として²¹⁾、後者は染料として用いられた。

2) 森林生産物②：安息香、麝香、蠟

いずれもラオスの産品として知られ、このうち安息香は当時のインドで大量の需要があった。ラオスからカンボジアへは、①と同様、華人、日本人、ラオス人、マレー人らによって運ばれた。ただ、これらの商品は、バタヴィアへの主要輸出品としてオランダ語史料にしばしば登場することから、マレー人やオランダ人によってバタヴィアへ運ばれ、さらにはインド方面へと運ばれたと

る [Muller 1917: 372] が、これは「イギリス人を管轄するシャーバンドル」を指すと考えられ、マレー人に対する反乱軍の反発姿勢から判断すると、この人物がマレー人であった可能性は高い。

21) 当時木綿は貴重品であり、足袋の原料として使われたのはもっぱら鹿皮であった [岩生 2005: 290]。

考えられる。また、当時からインドに拠点を持っていたイギリス人もこれらの産品に大きな関心を示し、大量に仕入れ、バンテン経由でインドへと運搬した。麝香も安息香ほど大規模ではないが、ラオス産のものが有名で、バタヴィアからインドへと運ばれていた。

また、蠟については、蜜蝋とカイガラムシ蠟の二種類があったが、いずれも蝋燭、化粧品、つや出し材の原料として、バタヴィア、インド、日本、中国へも運ばれていた。

3) 米

米は当時のアジア全域において、食料として重要な位置を占めていた。メコン、トンレサープ両水系周辺に広がる氾濫原では、カンボジア人農民の手で浮稲栽培が行われ、大量の米を産出した。米は、国内で消費されるばかりでなく、バタヴィア、海域世界の諸港市国家及び広南へと輸出された。

バタヴィアのあるジャワ島は米の産地であったが、VOCは内陸農村部を掌握するマタラム王国との関係を円滑に保てず、希望通りに米を入手できなかったため、輸入に頼らざるを得ず、輸入先の一つとしてカンボジアを重視した。

海域世界の諸港市国家（ジョホール、マラッカ、パタニなど）は、米を十分生産できるだけの土地を欠いていたため、17世紀以降、カンボジアは米の輸入先の一つとして重要であった。これらの地域には、マレー人が盛んに航海して、米を運搬した。

一方、中部ベトナムを拠点とした広南も、米の生産に必要な平野部が狭く、生産量に限界があった。加えて、ハノイ、紅河デルタを拠点とするトンキンと断続的な戦争状態にあり、これに対抗する軍事力＝人的資源を維持するためにも、安定した食料の供給が必要だった。このため、広南にとってカンボジアの米は重要であった。広南に米を運んだのは、同地とつながりを有する華人、コーチシナ人、ポルトガル人らであったと考えられる。このように、米もまたカンボジアにおいて重要な商品の一つであり、古米と新米のどちらを売るかを巡って、国王と商人たちの間で対立が起きることもあった²²⁾。

4) その他の産品

その他重要な産品として、干し魚が挙げられる。カンボジアは、東南アジア有数の淡水魚の漁場である、メコン、トンレサープ両川及びトンレサープ湖を抱え、漁業も盛んである。17世紀のオランダ語史料には、カンボジアから来航したマレー人船がもたらした商品として、干し魚がしばしば登場する。

最後に、生薬類として、カルダモン、雌黄（ガンボージュ）、山帰来などがオランダ、イギリスの文書に現れるが、量、史料に登場する回数とも少なく、これまでに挙げた産品に比べると重要度はそれほど高くなかったと思われる。

22) [岩生 1966: 108, 367-368]。

5) 対価となった商品

①インド綿布—海域世界からの産品

16世紀の交易の隆盛により、東南アジア全域でインド綿布の使用が広がり、商品としても重要になった。それはカンボジアでも同様であった。特にラオス産品を入手するために、それは非常に重要なアイテムだった。加えて、カンボジアの交易上のライバルであるシャムが、ラオスに毎年4万枚に及ぶインド綿布を持ち込んでいたため、カンボジアがラオス交易で優位に立つためには、シャム以上にインド綿布を持ち込む必要があった。この際に重要な役割を果たしたのがマレー人だった。彼らは、マレー半島、マラッカ海峡域の諸港市国家を通じてインド綿布を入手するとともに、その産地であるコロマンデル海岸に商館を構えて綿布交易を盛んに行っていた VOC とも良好な関係を保った。こうして、カンボジアの輸出品の対価として、バタヴィアや海域世界の諸港市国家からインド綿布がもたらされるという構図が固まった。その結果、1640年以降、カンボジアではインド綿布を大量に入手でき、米や森林生産物を大量に入手できる状況になった²³⁾。

②日本からの産品

一方、日本に輸出された、漆や鹿皮、蘇木などの対価となったのは、日本産の銀、銅、鉄、硫黄、樟脳、雑貨や工芸品などだった²⁴⁾。特に銅は、貨幣の原料としての重要性に加えて、大砲を鑄造する原料でもあり、各国の王侯にとって必需品だった²⁵⁾。また、工芸品の中では、肥前を中心とした陶磁器が重要である。当時の王都跡で採取された16世紀後半～18世紀前半の陶磁器片の中には、中国陶磁器に加えて、日本の肥前産の磁器が含まれている²⁶⁾。こうした産品が日本からもたらされたことは、オランダ語史料の記述からも確認できる。

③広南からの産品

カンボジア米の重要な輸出先の一つであった広南からの対価としては、絹と砂糖が重要であったことがオランダ語史料から確認できる。同時に、広南は中国や日本との中継地点としても重要であったから、中継交易で入手した日本や中国産の産品も含まれていた可能性も否定できない。

以上、3つの産品は、いずれも現地の、特に富裕層の服飾、嗜好品として珍重され、威信材としての役割をも果たしたものと考えられる。

23) [遠藤 2017: 25; 27]。

24) [岩生 2005: 275-276]。

25) [石井・桜井 1985: 219]、ただし、カンボジアにおいて当時銅銭が使用された記録は管見の限りなく、それが発掘されたという事例も今のところ見られない。

26) [北川 2006: 136; 150-154]。

おわりに

本稿では、17世紀のカンボジアで活動した交易勢力と、彼らがカンボジアから各地へともたらした交易品及びその対価となった商品について考察した。

主要な史料として利用したオランダ語史料の分析から見えてくるのは、17世紀のカンボジアは、決して衰退の時代ではなく、各勢力が相互に関連して交易活動に携わり、「交易の時代」の東南アジアの一翼を担っていたということである。

今回利用したオランダ語史料は、膨大な VOC 関連文書の一部に過ぎず、今後さらに分析を広げることで、新たな情報を得ることが期待できる。これについては、今後の課題としたい。

参考文献

- Dagh-register, gehouden int Castessl Batavia vant passerende daer ter plaetse Als over geheel Nederlandts-India.* 31 vols. 1624-82. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Kraan A. van der (2009) *Murder and Maybem in Seventeenth-Century Cambodia—Anthony van Diemen vs. King Ramadhipati I.* Chiang Mai.
- Mak Phœun (1995) *Histoire du Cambodge de la fin du XVII^e siècle au début du XVIII^e.* Paris.
- Muller, H. (1917) *De Oost-Indische Compagnie in Cambodja en Laos. 1636-1670.* Linschchoten Vereeniging 13. The Hague.
- 遠藤正之 (2010) 「カンボジア王ラーマーディパティ 1 世 (在位 1642～58) のイスラーム改宗とマレー人の交易活動—オランダ東インド会社との関係をとおして」『東南アジア 歴史と文化』39 (東南アジア学会) pp. 28-51.
- 遠藤正之 (2014) 「カンボジア・オランダ東インド会社間通商平和条約締結 (1656～57) —カンボジア王権とオランダ東インド会社の交易独占の試みをめぐって」『史苑』74-1 (立教大学史学会) pp. 9-34.
- 遠藤正之 (2017) 『カンボジアにおけるマレー人の活動—16～19世紀を中心に』(立教大学文学研究科史学専攻博士学位論文).
- ファン・フリート (1988) 「シアム王国記」『フーンズ、フリート、コイエット オランダ東インド会社と東南アジア』生田滋訳, 大航海時代叢書第二期 11, 岩波書店.
- 岩生成一 (1966) 『南洋日本町の研究』岩波書店.
- 岩生成一 (2005) 『日本の歴史 14 鎖国』中公文庫 (新装改版) (初版: 1974 年).
- 石井米雄・桜井由躬雄 (1985) 『東南アジア世界の形成』ビジュアル版世界の歴史 12, 講談社.
- 北川香子 (2006) 『カンボジア史再考』連合出版.
- 北川香子 (2015) 「ヨーロッパの船が河を遡ってきた頃—17世紀カンボジア史再考」『南方文化』第 41 輯.
- 桃木至朗 (1996) 『歴史世界としての東南アジア』世界史リブレット 12, 山川出版社.
- 永積洋子 (編) (1987) 『唐船輸出入品数量一覧 1637～1833 年—復元 唐船貨物改帳・帰帆荷物買渡帳』創文社.
- 山脇悌二郎 (1980) 『長崎のオランダ商館—世界のなかの鎖国日本』中公新書 579.